

感染症定期報告感染症別文献一覧表(再生医療等製品 2018/10/1~2019/3/31)

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	オルソブニヤウイルス検査陽性	ProMED-mail 20180611.5849758	2016年2月、ウガンダで原因不明の脳炎を発症した3歳女児の脳脊髄液を検査したところ、新規のオルソブニヤウイルスが検出された。女児は、発熱、頭痛及び腹痛を発症後、2件の医療機関で診察を受けたが、2週間後に3件目の医療機関に到着した時には昏睡状態であった。入院し治療を受けたが、意識を完全に取り戻すことはなく、そのまま退院となり、2週間後に死亡した。
2	ウイルス感染	Emerging Infections Summary. <a href="https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/698965/Emerging_infections_summary_March_2018.pdf">https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/698965/Emerging_infections_summary_March_2018.pdf</a>	2018年3月7日、BoDV-1感染に起因するヒトの急性脳炎又は脳症4例が報告された。うち3例は同一のドナーからの固形臓器移植者のクラスターに属しており、うち2例は死亡した。ドイツでBoDV-1による脳炎の追加症例1例が判明し、当該症例も死亡した。臓器移植を介したBoDV-1感染の可能性が報告されたのは本件が初めてである。シロハラジネズミがBoDV-1の病原体保有動物とされている。
3	ウイルス感染	HPS Weekly Report. 52(2018)60-60	2018年3月7日、BoDV-1感染に起因するヒトの急性脳炎又は脳症4例が報告された。うち3例は同一のドナーからの固形臓器移植者のクラスターに属しており、うち2例は死亡した。ドイツでBoDV-1による脳炎の追加症例1例が判明し、当該症例も死亡した。臓器移植を介したBoDV-1感染の可能性が報告されたのは本件が初めてである。シロハラジネズミがBoDV-1の病原体保有動物とされている。
4	ウイルス感染	ProMED-mail 20180328.5714656	2018年3月7日、BoDV-1感染に起因するヒトの急性脳炎又は脳症4例が報告された。うち3例は同一のドナーからの固形臓器移植者のクラスターに属しており、うち2例は死亡した。ドイツでBoDV-1による脳炎の追加症例1例が判明し、当該症例も死亡した。臓器移植を介したBoDV-1感染の可能性が報告されたのは本件が初めてである。シロハラジネズミがBoDV-1の病原体保有動物とされている。
5	炭疽	ProMED-mail 20180606.5843188	オーストラリア南西部におけるピメリアによる家畜の大量死は、炭疽によって引き起こされた可能性があり、影響を受けたMaranoa及びBalonneエリアの全ての生産者に、予防措置として家畜の死骸を焼却するよう警告している。St George及びDirranbandiで3件の重大な炭疽に関するインシデントが発生した。2017年3月には、グレーディングによって引き起こされた土壌攪乱後に、St Georgeの土地で120頭のウシが炭疽で死亡した。
6	炭疽	ProMED-mail 20180722.5919022	2018年6月初旬、オーストラリアのクイーンズランド州のDirranbandi及びSt Georgeエリアにおいて、ウシにおける炭疽感染1件が確認された。2016年以降、同地域のウシで4件目の事例である。
7	細菌感染	CDC MMWR. 67(2018)962-963	2017年7月、65歳の女性1例が、左下腿の約10 cmの壊死を発現した。女性は救急外来を初めて受診してから約36時間後に敗血症性ショックと多臓器不全を発現し、入院してから2日後に死亡した。女性の既往歴には多発性骨髄腫とアミロイドーシスがあり、免疫抑制剤による治療を受けていた。治療開始前に採取した血液培養から <i>Vibrio anguillarum</i> ( <i>V. anguillarum</i> ) を特定した。ヒト疾患に関連した <i>V. anguillarum</i> が初めて報告された事例である。

ID	感染症(PT)	出典	概要
8	ブルセラ症	IASR. 39(2018)84-86	日本において、新規ブルセラ属菌による感染症例が初めて報告された。患者は60歳代の男性で、2017年6月、急性腎障害による尿毒症の診断で入院した。血液培養の結果、グラム陰性桿菌が検出され、ブルセラ属菌と判定された。また、腎生検の結果より、当該菌感染に合併した腎炎と診断された。その後、ブルセラ症の再燃は認められていないが、ブルセラ症の治療後も腎機能は回復せず、維持透析導入となった。なお、同居の妻には感染の徴候は認められていない。一方、患者より分離されたブルセラ属菌は、遺伝子解析により、自然宿主をげっ歯目とする <i>Brucella suis biovar 5</i> と近縁であることが示され、既知のブルセラ属菌ではないことが明らかとなった。患者には渡航歴はなく、喫食歴、動物との接触歴等の聞き取りや自宅周辺調査からは感染経路や保菌動物を明らかにすることはできなかった。
9	ブルセラ症	IASR. 39(2018)123-124	日本において、新規ブルセラ属菌による感染症例が報告された。患者は40歳代の女性で、2018年1月末から38℃台の発熱を認め、近医を受診し血液検査で貧血が指摘されたが、その他の異常は認められなかった。解熱剤が処方され、数日で症状の改善が認められたが、微熱は継続していた。症状の増悪及び寛解を繰り返していたが、2月下旬から再び38℃台の発熱を認め、救急外来を受診した。原因精査が行われたが、明らかな熱源は認められなかった。総合内科を受診し、両膝関節痛があることから膠原病が疑われ、鎮痛剤が処方された。初診3日後、血液培養にてグラム陰性桿菌が検出された。初診10日後から入院した。グラム陰性桿菌感染症に対して、セフトラジム水和物の投与を開始した。入院8日目に分離菌の16S rRNA解析にてブルセラ属菌と判定された。
10	ブルセラ症	ProMED-mail 20180630.5883595	The Austrian Agency for Health and Food Safety (AGES) はオーバーエスターライヒ州のRohrbachエリアの乳牛の群れにおいてブルセラ症を確認した。2018年1月以降、該当する農場においてウシの流産及び子ウシの死亡数が増加している。当該農場の獣医は調査を実施し、血液サンプルを採取し、AGESは2018年6月22日にブルセラ症を確認した。オーストリアでは、過去10年間、ヒトにおいて1年あたり1~7例の輸入症例が認められている。2018年には、2例のヒトにおいてブルセラ症が報告されている。